
彼が主役なストーリー

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼が主役なストーリー

【Nコード】

N0505K

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

新しい家族を紹介する。と言って親父が連れてきたのは金髪碧眼の美少女で自称魔術師だった。「……おい、親父。売春規制法って知ってるか？」

冴垣 壮介は父親が軍隊マニアの警察官であることを除けば実に一般的な高校生である。

体格は中肉中背。

成績は中の中。

至って平々凡々であることを自覚さえしていて主役はおるか脇役にすらなれそうもない、言うならばエキストラの1人だ。

自分は選ばれなかった物としてそれ以上を求めることはない。

彼にとって人生とはそういう物だったし、そういう物であることを望んでいた。

……はずだったのだが。

「おい 壮介。新しい家族を紹介する」

そういつて壮介の父親が首根っこを掴んで連れて帰ってきたのは金髪碧眼でゴスロリファッションな名乗る美少女だった。

「おい、親父。売春規制法って知ってるか？」

壮介は日本の警察はついにここまで落ちぶれたのかと嘆息した。

「どうした、壮介。これから1つ屋根の下で彼女と過ごすんだぞ。自己紹介ぐらいしないか？」

「……冴垣 壮介です。なにがあっただんですか？ 逃げた方がいいですよ！」

金髪美少女はきよとした顔で首を傾げる。言葉がわからないのかもしれないと壮介は思ったがそうではなかった。

「いえ、逃げてきたんですけど」

壮介は家出少女かなにかを一時的に預かっているのかと思い至って父親を見た。父親は、

「彼女は魔術師だそうだ」

と笑顔で言った。

「……what？」

「素敵な発音ですね」

金髪美少女は笑みを見せたがその感想は致命的に間違っている。

「申し遅れました。私、反応抑制系原発制御型魔術師で通称【^{グラト}底無しの聖杯】と言います。ゴブレットとお呼びください」

「……………」

壮介は言葉が出なかった。ぺこりと頭を下げた金髪美少女の言葉には冗談というモノの響きが一切なかったからだ。

「ちなみにグラトニーと呼んだらこの世の地獄を見せて差し上げます」

「あの、ゴブレットさん」

「はい」

「その原発制御に魔術師とやらが絡んでるなんて話はインターネットに出ていないのですが」

「機密事項ですから」

「その機密事項をペラペラとボくらみたいな一般人に話してもいいのでしょうか」

「もう逃げてきちゃったんでわたしの知ったこっちゃありませんね」

「その機密事項を知ってしまったボクらの身の安全は保証されてるんでしょうか？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。わたしと関わった時点でお二人は既にバリバリ全開ナンバー1の抹殺対象ですから」

気まずい沈黙が数秒流れる。

「あつはつは。壮介、じゃあゴブレットさんと一緒に買い物に行つてきてくれ。父さんは逃げるから」

「このクソ親父い！」

壮介は父親の胸ぐらを掴んだ。

警察官の父親に腕つぶしで敵うはずもなくぼっこぼこにされ、壮

介はとぼとぼ家を出た。

隣にゴブレットが続く。買い物用の手提げカバンを片手にするゴブレットは見慣れない金髪碧眼でこそあるが単なる年頃の少女にしか、壮介には見えない。

「……なあ　なんでうちなんかに来たの？」

「逃げ出したはいいのですが、着の身着のままだったので炉銀が底をついて行き倒れているところをあなたのお父上に助けて頂いたのです」

ゴブレットはどうしても『魔術師キャラ』を突き通すつもりらしい、と壮介は考えて少し意地悪な質問をしてやろうと思いついた。

「なあ　あんたほんとに魔術師なのかよ？」

「はい　魔術師ですよ」

「証拠は？」

「えーっと、そうですね。じゃああの落ち葉を見てください」

ゴブレットは道脇の枯れ葉を指差した。

ゴブレットが人差し指をピンと立てて小さく円を描く。

「Burn（燃えよ）」

呟きと共に葉はボツと明るい火を上げて灰へと変わった。

壮介は啞然とする。なんだかんだ言ってもゴブレットの言うことなどまったくもって信じていなかったからだ。

「これで信じていただけました？」

「あ、ああ……」

開いた口が塞がらない、という状況に生まれて初めて陥ったかもしれないなかった。自分はもしかしたらとんでもないことに巻き込まれたんじゃないかと今更のように気づく。

「親父の前では、動かないで」

ゴブレットは壮介の前に手を突き出した。不意に触れた肩の柔らかさに壮介はドキッとする。が続く言葉はそんな気分を吹き飛ばした。

「追っ手です。しかし事情を知らない雑魚でしょう。このまま戦闘

に入ります」

「は、はひっ?!」

ゴブレットが言い終わるか否かのタイミングで向かいから歩いて来ていた1人の男が舌打ちをしながら両手を広げた。

男の手のひらに右にはバチバチとはぜる紫電、左にはゴウゴウと燃える紅の炎があがる。

「う……そ、だろ?」

男はそれをゴブレットと壮介に向けて放った。

どこにも逃げ場のない狭い路地だ。このままでは二人は黒焦げになることは必至だ。

「芸がない」とゴブレットは呟いた。そしてスッ……と息を吸い込んだ。

途端に雷も炎もなにかに吸い込まれてしまったように消えた。

「?!」

「Burn!」

ゴブレットは指先で円を描くと叫んだ。壮介の視界の先で何かが光る。男の手にみるみるうちに火傷が広がる。

ゴブレットの使っている魔術の正体は太陽光だ。指先で描く円の示すレンズを通して太陽光を集約して物体を加熱させる魔術であるが、壮介にはそんなことはわからない。ただ人間の焼けていく光景を恐ろしく思った。

「退きなさい。あなたではわたしには勝てません」

男はゴブレットを一睨みすると脇道に消えていった。

ペタンと尻餅をつく。

「ご無事でしたか?」

ゴブレットが振り返って手を差し伸べる。壮介は一瞬、その手を取ることを躊躇った。この手は簡単に人を燃やせる手だ。

「……あの程度の火傷なら魔術的に治癒を施せば痕跡さえ残らずに完治するでしょう。それにやらなければ殺られていたのはわたし達です」

ゴブレットは少し寂しそうに笑った。

そんな顔を見せられては壮介も手を取らないわけには行かなかった。その手の感触はやはり柔らかい。

「やっぱり、ご迷惑ですよね……」

ゴブレットは俯いてしまった。壮介はどうしようもなく心が粟立つ。だけど実際に恐かった。だけど実際に――

（ああ……）

非日常に魅了されている。と壮介は思う。わずか数時間を共に過ごしたただけなのに俯いてしまった少女が、どこか愛しい。

「……そういえば、親父の前では魔術つてのを見たのか？」

壮介はなんだか沈黙が辛くて先ほど聞き損ねたことを訊ねた。どうせ見せていたのだろうと思うが他に訊くようなこともなかったのだ。会話がしなかった。

「いいえ」

と、ゴブレットは言った。

「あの方はわたしが魔術師だと名乗るとそのままだ『そうか』と」

「っ……、じゃあ親父は」

壮介と同様に魔術師というのを真に受けていた訳ではなかった……

……？

「もう逃げてらっしゃるのでは？ 先ほどそう――」

「バカ！ あんなの冗談に決まってるんだろ」

追っ手、とゴブレットが言った先程の男は二人を見るなり容赦なく襲いかかってきた。

悪い予感がして壮介は家のほうへ駆け戻った。

ゴブレットが後ろから付いてくるがそこは男女、壮介のほうからは速いようで差はどんどん開いていく。

惨状はあきらかだった。先ず玄関の扉が破壊されていた。血のあとが続いている。壮介はそれを追って和室へと踏み込んだ。

「親父っ！」

「壮介、男女の逢い引きに割って入るとは感心しないな？ います

ぐ出ていきなさい」

父親はいつものように軽口を叩いたがその腕からは鋭い傷が覗き血が畳を濡らしていた。喉元には刀の切っ先を突きつけられている。「単刀直入に聞こうか。グラトニー・ゴブレットはどこだい？」

2mはあるうかと言う刀を持つボディーラインにぴったりの黒い服の女性が壮介を振り返る。

（なんなんだよ……）

刀の先には当たり前のように血がついている。

「ここ、ですよ」

小さく息を切らしながらゴブレットが追いついてきてしまった。女が薄く笑う。壮介はゾクリと背筋に戦慄が走るのを感じた。テレビニュースで見えるような、数人は殺していそうな人間の目だった。指先が震えていることに気づく。冷徹なまでの殺意は壮介を凍てつかせるに充分だった。

「おいゴブレット。あいつは何なんだ……？」

「魔法番隊第13位、『ブラック・ブラック・ブラック暗くて深い漆黒』のアサギイクツキ。はつきり言ってボスキャラです。正直、

わたしじゃ勝てないかも……」

「お前さつき自分がめちゃくちや強いみたいなこと言ってたじゃねえかよ！」

「いえ わたしもあんな戦闘特化が出てくるとは…… けどまあ大丈夫ですよ」

ゴブレットはまた少し寂しそうに笑った。

「あなたとお父さんくらいは守って見せます。ご迷惑おかけしました。楽しかったです。ありがとうございます」

「っ……」

ゴブレットは前に進み出る。

「確認する。『底無しの聖杯』で間違いないな？」

「はい」

「出勤命令に応じずに逃亡した罪をいまならまだ見逃してやると上

層部は言っているがいまからでも徴兵に応じるか？」

「否です。わたしはこの力を他国に向けるなんてことは絶対にしません」

「貴様の存在は此度の『戦争』の結果を大きく左右するモノだ。そのような私見はまかり通らんよ」

「な、なんだってんだよ……？」

他国？ 戦争？ 存在？ なにを言っているのかわからない。壮介には魔術についての知識はまったくないがゴブレットのレンズの魔術は襲ってきたあの男の炎と雷よりもはるかに攻撃能力は低いように見えた。それにゴブレット自身が言っていたように彼女は『原発制御型』であって『戦闘特化型』ではない。

戦争にゴブレットが必要になるとは壮介にはどうしても思えない。一般人に言っても無駄だろうがな、

幾月 朝義は刀を下げた。だがゾクリとするような笑みは引かない。

「もうすぐ世界規模の魔術大戦が起ころうとしている」

ガチガチと震えが奥歯にまで広がる。

「その女の特異な能力は息を吸い込むことでありとあらゆるエネルギーをその場から吸収して自身の体内に溜め込むことだ。だから『底無しの聖杯』と呼ばれているのだよ。」

そして原子炉の余剰エネルギーを吸収して炉の出力をコントローलする役割をしていたこいつの中には莫大なエネルギーが蓄積されているのさ。それを他国に向けて放つことができればどうなると思う？」

幾月は一度言葉を切った。震える壮介とゴブレットを一瞥して、続ける。

「我々が世界を牛耳ることも不可能ではない。わかったらさっさとその女を突き出せ。それだけで貴様の命は助かるぞ、少年」

ゴブレットは振り返らなかった。それと同じように壮介はゴブレットをつきだそうだななんて少しも思っていなかった。

だって、ゴブレットは何も悪くない。

逃げ出さないといけないようなことなんて何もしていない。

「あなたと戦います。わたしが負けたら従いますから、二人には手を出さないでください」

「……『決闘』か。いいだろう。こちらとしては貴様さえ手に入ればどうでもいいからな」

幾月は刀を鞘に納めると居合いの要領で窓に刀を一閃した。

キーン　と鋭い太刀音がして金属部分までが豆腐のように切断される。

「ここは手狭だ、屋外に行こう」

そのまま人間には到底不可能な跳躍力で飛び出して行った。

「……大丈夫、なにも心配しないでください」

壮介にはそのあとに続くゴブレットを見送ることしかできなかった。ゴブレットもまた震えていた。

嵐が去ったあとは至って静かな物だった。軍隊マニアの父親は応急措置ぐらいは自分で出来ると豪語し実際テキパキと処置を終えてしまった。

喪失感があった。

バチン、と背を叩かれて壮介は父親を見た。

「行ってこい」

それを受け取って壮介は少し目を落とし、やがて大きく頷いた。

「このあたりでいいな」

幾月　朝義はとある公園に降り立った。そこはただっ広い平らな土地が広がっていて普段は子供らがサッカーなんかに興じている場所だ。

ゴブレットが数十秒遅れて静かに降り立つ。その時間の差はゴブレットと幾月の魔術的な技量の差を明瞭に示していた。

「では、始めようか」

朝義は居合い抜きの構えを作る。『存在を強化』する魔術を得意とする彼女にとって間合いはほとんど意味をなさない。刃の存在を魔術で延長すればそれでこと足りるからだ。その上で速度と威力の両方を極めた居合いという技はまさに必殺と呼ぶに相応しい威力を誇っている。

抜けば勝つ。彼女はそれだけの技量を持つ魔術師の一人だった。だから、彼女は異様な手応えのなさが信じられなかった。

（空振りだと……?!）

彼女の限界値である約3倍まで存在を延長したはずの刃は形をなさずにただ2m近い抜き身の刃だけが空を滑る。ゴブレットは間合いの遙か外にいる。

『底無しの聖杯』が刃の延長のためのエネルギーを吸収してしまっただのだ。

（放出系だけでなく強化、付加系魔術でさえ吸収の対象内だと言うのか！）

舌打ちしてBurn、の声と共に打ち出された光線を横っ飛びに回避する。

連続して打ち出される光線を弾くために刀を振るう。彼女はほとんど慣れで存在の延長を使った。

無力化される。当然そう思ったが光線が弾かれ、同時にゴブレットの肩口が浅く切り裂かれた。

（……そうか あいつの魔術の発動には発声が必要、つまりそのあいだは息を吸い込むことで発動する無効化の能力を使うことはできない）

そこから幾月は速かった。刀を鞘に納めると居合い抜きの構えを保ったままゴブレットに突進する。光線の魔術で迎撃すればゴブレットはその刹那に切り裂かれてしまうだろう。

ゴブレットは大きく円を描いて光線の魔術を準備段階まで起動した。

（まさか……!）

幾月には一瞬でわかった。ゴブレットは食らうつもりだ。寸前で『存在の延長』と『存在の強化』、幾月の操る2つの魔術を無効化し居合いの一撃を食らい、耐える。その上で光線の魔術で攻撃する。(ナメられたものだ……！)

もちろん幾月には絶命しない程度に力を止めるつもりこそあるが、幾月の使っている大刀はふつうの日本刀だ。当然斬れるし斬られれば痛い。その痛みのなかで光線の魔術を放つことなど不可能だ。

幾月は必殺の間合いに入った。

そして――、

「グラトニーっ！」

幾月の放った刀の一閃は割って入ってきた少年に突き刺さった。ゴブレットの無効化能力によって『存在の強化』こそ無力化されているがその切れ味が暴威を振るうのは想像に難くない。

「しまっ……」

幾月にゴブレットの放った光線の魔術が突き刺さる。幾月は寸前で自身の皮膚の存在を強化し火傷を防いだ。

(まだ……戦えっ……)

あるいは生半可に防いでしまったのが彼女の続闘を不可能にしまったのかもしれない。存在の強化された皮膚は押し寄せる熱を外に逃がせなかった。

ぐわんぐわん と熱中症患者のように視界が回り幾月 朝義はそのまま地面に倒れ伏した。

「バカッ どうして！」

ゴブレットは壮介の肩を揺さぶった。重傷患者を迂闊に動かしては行けないだとかそんなことは完全にいまの彼女の眼中にはない。

「いつ……、」

壮介は小さく呻き声を挙げた。ゴブレットは我に返る。得意でな

い治癒の魔法でも気休め程度にはなるかと服を捲り上げた。

「へ……？」

「いつってえええっ……」

そこに、刀傷はなかった。赤くなっていた。腫れが目立つ。壮介の傷は見た目にはそれくらいだった。よく見たら服も切れていない。

「あ、これ、親父の趣味の防刃服で…… ぎゃあっ?!」

ゴブレットは力一杯壮介を抱き締めた。ちなみに『斬れていない』というだけで肋骨は折れてたりするので当然、超痛い。

ゴブレットは悲鳴に近い壮介の声を聴いても力を緩めなかった。

そのうち悲鳴には「いじじ……」という意味不明な奇声へと変わる。

「わたしのことをグラトニーって呼んだよね？」

涙ぐんだ声を強がりで隠して、ゴブレットは言う。

「この世の地獄を見せてあげるんだから！」

もう見てます、と壮介は思った。

終

（後書き）

・あとがき

イメージは「読み切り短編漫画」です

連載にしようかと思ってとりあえず一話分書いてみたけど、地の文のへたくそさとかは置いといてキャラクターの魅力がいまいち出せてない気がする……

どこが悪い、とか指摘していただけると嬉しいですm(_____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0505k/>

彼が主役なストーリー

2010年10月8日15時08分発行